

# 資料涉猟余話 その1

地域の貴重な資料が急速に忘れ去られていく昨今、峡谷に遺された先人たちの足跡をたどる仕事をしていると、たとえば薄汚れた紙切れ一枚の背後にも、有名無名、多くの人々の累々とした営みが潜んでいるのを感じる。先年、仲間と『伊那谷の文学碑』を出版し、また文化財関連の調査をしていると、この地域の奥深い文化と歴史の諸相に接し、その度に、忘却された事柄の、あまりに多いことに気づかされ、驚かされるのである。

翻って、物の価値の変貌激しい近現代にあつては、先人のせつ

く遺してくれた文物も、その意味の消失とともに忘却される運命にあることも、また致し方ないことである。しかし、あまりにも無思慮に物が捨てられ

## 郷土の人と資料との巡り会い

吉澤 健

る時代になった。それらは本来自分たちの拠

つて立つ足元の土ではないか……。はなはだしきは、文字や写真として遺されていた、意味のあるはずの文物がゴミ集積場や資源回収置き場に持ち込まれる昨今である。

冊子や本・写真ばか

りではないが、それらの物は、必要とされた意味があつたはずであり、その意味が断ち切れた時にゴミに変わったのである。そこで、その意味を復活させ、分断されていた「物」や「人」を繋げていくことで、消えかけた存在の意味を取り戻すこ

とができるのではないか。

そう思っていたのは私どもばかりではないらしく、「捨てないで！」を合い言葉に四年前に立ち上げた公益社団法人南信州地域資料センターには多くの人から、忘れられたり、

放棄されていた本や写真、書画が寄贈された。それらも一点では点だが、集まると線から面をなし、時代状況を浮き上がらせる。その集積の中で、当時その「物」が存在した意味

で活躍した近代以降一万人規模の「文化関係人物事典」を編もうと既に七年越しでカードをつくっている。その調査研究の過程で浮かび上がってきたカードに盛れない「人」と

まり顧みられなくなった物の中から拾い出した、古くて新しい物を、仲間と一緒に少しずつ紹介していきこうと思う。もとより体系的に整理したものではないので、時代はあちこち



蔵での整理・搬出作業風景

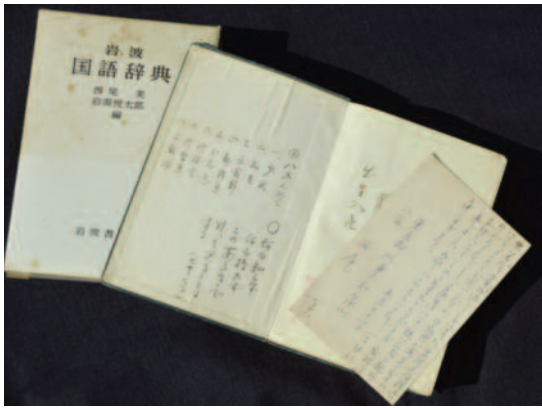
を取り戻すとともに、現代を生きる私どもにとつて新しい意味を付与してくれるのである。

そこに価値を見いだした仲間で、この地域

「物」、そして郷土に繋がる逸話等が、たくさん発掘された。そうした資料「物」や「人」が溜まってき

たので、「南信州」の紙面をお借りして、あ

すると思うが、見慣れたこの地域の景物が何かひとつでも違って見えたら幸甚である。



蔵での整理・搬出作業風景

現在第七版を重ねる岩波国語辞典は、下伊那郡豊村帯川（現阿南町）出身の西尾実と岩淵悦太郎の編集で、第一版は一九六三（昭和三八）年四月十日の発刊である。

この辞典の特徴は、単に言葉の意味を記すだけでなく「春」に例

を取れば、英語では「スプリング」といい、これは別に「ばね」や「泉」の意味を持っている。このように「春」という言葉には地の底からわき出る水のように、またおさえつけて

もはね返す力があるという意味を持つていることを説明に加えることを基  
本方針とした画期的な辞典であった。  
◇ 南信州資料センター、通称「捨て

ないで」の活動は、い  
ただいた資料が現在3  
万点を越えるので復本  
を二部まで確保し、そ  
れ以上のものは希望者  
に活用していただいた  
り、廃棄処分を実施し  
ているが、その最終点  
検を立场上筆者が行っ  
ている。

料をいただいた矢高行  
路（東）で、ハガキの  
裏面に文章が記され、  
差出人は「西尾実」と  
あるので、改めて文章  
を読み返した。そこに  
は次のように記されて  
いた。

ます。  
五月三十一日  
東京都杉並区和泉町  
八一五  
西尾 実

刊後わずか一カ月半の  
間にこうしたことがや  
り取りされた速さに一  
驚させられる。  
この頃の西尾実を持  
病の眼疾が進み、山下  
先生の口述筆記や代筆  
が多くなっていたが、  
文学博士号を受け、講  
演も多く多忙の時期で  
もあつた。そうした中、  
このようなハガキを返  
した西尾の学者としての  
誠実さ、こまやかさを  
語る貴重な資料の一  
つではないかと思いい  
文を草した次第。

## 西尾実のハガキと岩波国語辞典

吉澤 健

記した岩波の国語辞典  
があつた。また辞典か  
と思いつながら何気なく  
パラパラとページをめ  
くっていると、はらりと  
一枚のハガキが落ち  
た。おやつと思ひ宛名  
を見ると「矢高行路様」  
とある。辞典の持ち主  
はかつて貴重な郷土資

さっそくお用いただき  
れ御感想をお聞かせく  
だされありがとうございます。  
まず。言語生活につき  
鋭い反省と観察をお持ち  
ちになつていられるあ  
なたからのおことは、  
感銘深く承りました。  
お励ましに承えたいと  
存じ一言御礼申し上げ

十八年である。  
この年の四月に辞典  
が発刊され、矢高は早  
速購入し、使つてみて、  
その感想や気づいた点  
を編集者の西尾実に書  
き送つたのである。二  
人はかねてから相知る  
間柄であつたことも文  
面から伺われるが、発

辞典のあと表紙裏に  
矢高は絵を描き、箴言  
を記され、ハガキをは  
さみ、愛用されていた  
ことが推測される一冊  
であつた。（文中敬称  
を略させていただきます）



このコラムの22回で、嶋さんによる下平政一と彼が作成した豪華肉筆本についての紹介があった。

昨平成25年の末、開善寺の庫裏に、北一明

という方の預かり荷物があった。20年余、手つかずであり、所蔵者に繋がる情報はないかと問い合わせがあった。下平政一から娘の和子

さんに辿りつき、結局、資料センターで処分することになり、下見したが、その折、庫裏の根太を沈ませて踞っている膨大な資料の中から、展覧会パンフレット

## 北一明こと下平昭一君の著書と資料

吉澤 健

トの一つをいただいて

きて、目を通しびっくりした。

荷物の預け主、下平政一の息子・北一明とは本名が下平昭一といい、あろうことか筆者の高校の同年生であった。面影は記憶にあったが、卒業後音信が途絶えており、パンフレットに記されていた

生メカニズムをつきとめて諸作を制作し、従来の焼き物の美を変え

る理論と実作を試みたのだという。こうして作った諸作を丸善画廊・京王百貨店・根津美術館その他で展覧し、ニューヨーク・上海その他外国でも個展を開くまでにな

館・池田二十世紀美術館・広島平和記念館はじめ大英博物館・ボス

トン美術館・カナダ国立ビクトリア美術館・上海美術館などに収蔵されているという。さらに北は作品制作に、ヒロシマの原爆を浴びた土を使い、世界平和の願いを込めて制作しているということ

はみつからなかった。北の著書『陶芸入門』(昭和53年11月・鶴書

房)には「陶芸史上唯一の謎とされていた『耀』(北はこの字を使っている)変の創造に成功する」と記してあるから、その秘密をつきとめたと思うし、作品図録には確かに曜変天目と思われる諸作も記載されているのだ

次の経歴によって、その後の活躍の様子を知った。

大学卒業後、陶芸の道に入り、独学を重ね、築窯して制作した。その後独自の研究により、曜変ようへんによって偶然出現するといわれており、発生が謎とされている「油滴点目」の発

った。中国上海で開いた「北一明〈創造美の世界〉展・特集」のパンフレットには美術評論家・詩人の宗左近や

安藤次男、飯田出身の後藤総一郎の諸氏をはじめ、諸外国の研究家・大学教授らが賛辞を呈している。こうした北の作品は根津美術

い出したりした。しかし、前述の曜変天目発生のメカニズムについては、平成19年

6月17日の朝日新聞「曜変の光に魅了され陶芸家たち」の特集記事があり、5人の陶芸家が紹介されていたが、その中に北の名前

2トン車2台余になつた北の膨大な荷物・書物の中には、この他に、『ある伝統美への

反逆』(三一書房)、『新やきもの入門』(主婦と生活社)他、各種カレンダーなど北の著作・制作になる資料もあった。北は、平成24年10月19日歿。行年78歳であった。



北一明と、彼の著作

この一冊に最初に出合ったのは小野惣平先生のお勧めによってであった。

小野先生には叱られました。たたくさんのことを教えていただきたい。日本刀についてもその一つで、未だに刀を手にするのが教えていただきたいことが想い起こされてくる。

「日本刀は鉄の藝術だ。鉄を鍛えて、本来実用であるから折れ

ず、曲がらず、欠けず、

しかもこれだけ美しい姿に作り上げたのは、世界広しといえども日本だけである。鉄の表面を美しく仕上げ、刃紋つける技術はまさに

## 四〇年ぶりの読書

### 本間順治著『日本刀』

鉄の藝術で、大英博物館に大切に収蔵されているのもその美しさの

故である」と教えてくださった。

さらに、「刀の本当の良さは、鞘さやをはらって、振ってみて初めてわかる」と言われ、ご所持の刀について、そうすることを勧めてください。軽過ぎても重過ぎても腕や体に余分な力が入ってしまうこ

とを実感させていた。古今の名刀とは単に姿・形が美しいだけでなく、こうしたことを併せ持った刀である。と想像を逞たくましくしたものである。

さらに先生は、何事につけても本物を見るのが大切だと言われ、この本間順治著

『日本刀』を覚えてくださったのであった。

しかし若輩の私にはこの本は難しい部分の多い一冊であった。著者本間さんの刀に関する造詣の広さ、深さの故であったと今にして思う。したがってその後手にもなることもなく、入手したいと思いつつ

四〇年を経ていたが、「捨てないで!!」の活動に寄せられた一冊として著者の眼の前に現れたのである。

さて、一九〇四（明治三七）年、山形県生まれの本間順治さんについて。「本間様には及びもないが、せめて成りたや殿様に」と俚

謡にもある地区の名家・素封家、本間家の生まれであるという。

『朝日人物事典』（一九九〇刊）によると、日本刀研究家。國學院大学在学中から研鑽を積み、卒業後文部省に入省、刀剣調査に当たる。

戦後国立博物館（現東京国立博物館）調査課長として国宝や重要美術品の調査保存に従事。

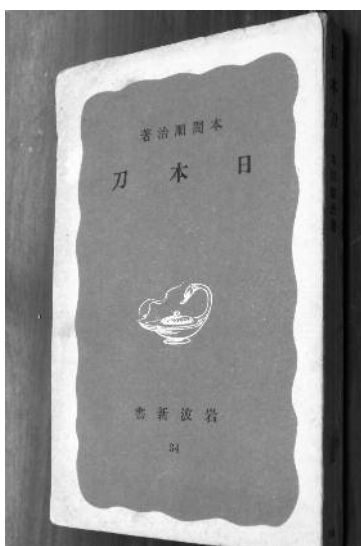
敗戦後、日本刀の製作・保存を禁止した連合国側と粘り強く交渉して、日本刀の芸術性を認めさせ、美術刀剣の保存を実現させた功績は大きい。日本刀剣保存協会初代会長。号 薫山。

戦後、連合国命による刀剣回収という出来事があった。第何次か

の「刀狩り」とも称されたが、刀剣を持つことを禁じ、所持者は地区の責任者に提出するようにというお達しで、筆者の家でも蔵の長持の中の刀を何本か届けたことを思い出す。

集めた日本国中の刀剣は靖国神社の境内に山と積まれ、燈油をかけて焼却したのだとも伝え聞いた。

本間さんが日本刀剣保存のためにどのような交渉をされたのか、そのあらましを知りたいとも思っているが、そうした資料はほとんど出て来ない。



本間順治著『日本刀』

前稿で取りあげた本間順治著『日本刀』に  
関連して、今回は南信  
州地域資料センターで  
お預かりした軍刀につ  
いて紹介する。

第二次大戦に出征の  
折、親から贈られた刀  
を軍刀仕立てにして持  
って行った刀が、本人  
戦死の後、縁あって持  
ち主のところに戻った  
もので、軍刀仕立てを  
解き、白鞘しろがまに納めた一  
振で、文化財保護委員  
会発行の「銃砲刀剣登  
録証」を備えた、長さ  
一尺九寸三分（58・5  
センチ）の脇差である。  
あつらえて作った木  
箱に入っており、箱表  
に北原痴山が「軍刀一  
振、航空兵准尉戦歴之

愛刀」と、箱蓋裏には  
次のように書かれて、  
戦争半ばにして既にこ  
のような状況であった  
のかと、当時が偲ばれ  
感慨深い。

「昭和十八年三月十

## 第二次大戦出征兵士の

### 遺愛の軍刀

三日 チモール島ラウ  
テン飛行場より索敵線  
哨戒の目的を以て出  
動、任務遂行中敵機に  
遭遇 空中戦を実施敵  
を重撃せしも機体を破  
損 飛行場近くまで飛  
翔せしと雖も機より発  
火し終に愛機と運命を  
共にせり 此軍刀は友  
軍に依りて燃ゆる機中

より取り出されしもの  
也 昭和十八年十一月  
十一日公葬の日 痴山  
学人謹記」（旧漢字、  
字アケは筆者）  
元の刀は二尺を越え  
る打刀であったと思う  
が軍刀に仕立てるため  
に摩すりあ上げたのではな  
らうか。二尺よりわず  
かに短くなっており、

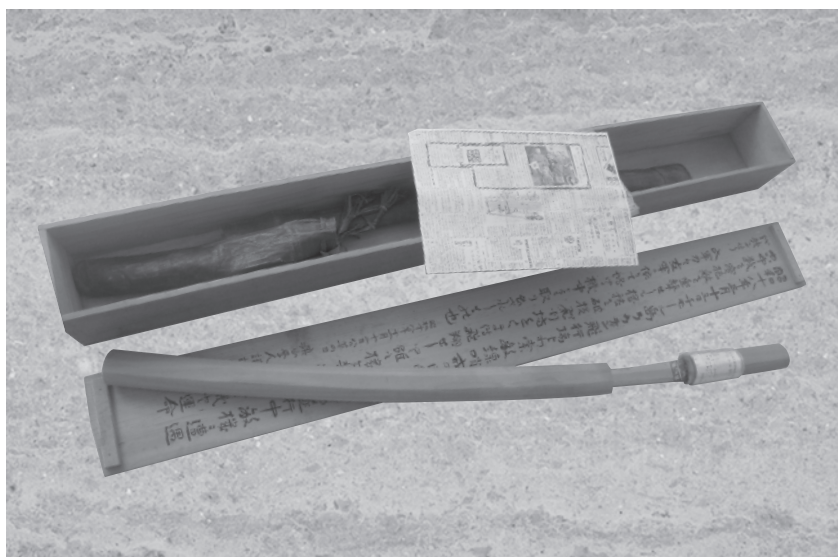
かもしれない。  
いずれにしても第二  
次大戦に参加しながら  
生き残り、前稿で記し  
た戦後の刀剣回収もま  
ぬがれた貴重な一振で  
あることに間違いな  
い。  
また箱の中には「倅せがれ  
ようんと働いたか」の  
見出しのある昭和十七

茎なかこには作刀者の銘も刻  
んであったのではない  
かと推測されるが、無  
銘となっており、作者  
はわからない。しかし  
刃紋は三本杉系の匂造  
りであるから関系統せきぎょうの  
刀と考えられる。目釘  
穴の位置からみて、も  
ともと無銘であったの

年二月十七日の朝日新  
聞があり、この刀を贈  
った記事が記載されて  
いる。この日の新聞の  
第一面の見出しは「シ  
ンガポール陥落」で、  
勝ち戦に日本中が沸い  
た様子を伝える新聞で  
あるが、戦死者の氏名  
も多く記されている。  
しかし、刀を贈られた

本人は健在であった。  
シンガポール陥落と  
いう勝ち戦の記事と  
「倅せがれようんと働いたか」  
の記事との関係はいま  
一つはつきりしない  
が、シンガポールを陥  
し入れることになりに  
関係する部隊に属して

いたのかとも想像され  
るところでもある。  
この記事中、贈った  
刀は「藤原壽命作の名  
刀」と記されているの  
で、参考までに記して  
おく。



炎上する機内から救い出された日本刀